第十九回

名曲能の会

船弁慶

真之伝

平成二十九年十二月九日（土）午後一時開演
（正午開場）

喜多六平太記念能楽堂

東京都品川区上大崎四―六―九
TEL・03（3491）8813

□出演者の紹介

野村　万作（のむら・まんさく）
狂言方和泉流。一九三一年生まれ。六世野村万蔵の次男。初世野村萬斎および父に師事。芸術祭大賞、紀伊國屋演劇賞、観世寿夫記念法政大学能楽賞、日本芸術院賞、朝日賞などを受賞。紫綬褒章を受章。重要無形文化財各個指定保持者（人間国宝）。日本能楽会会員。著書に『太郎冠者を生きる』など

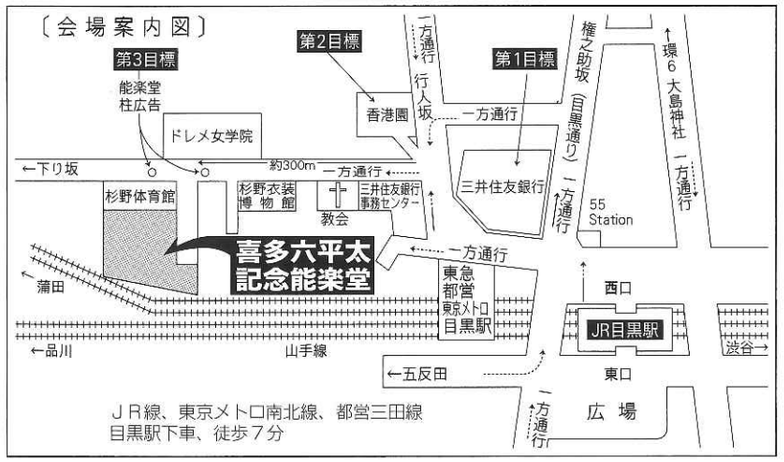
大村　定（おおむら・さだむ）
シテ方喜多流。一九四九年生まれ。大村武の三男。十五世喜多実に師事。「翁」「道成寺」「石橋」「望月」「安宅」などを披く。名曲能の会および定会・稔会を主宰。喜多流職分会同人。日本能楽会会員。

大村　稔生（おおむら・みのり）
二〇〇九年生まれ。大村定の孫。
平成二十四年仕舞「老松」にて初舞台。以後「花筐」「自然居士」「百万」「烏頭」などの子方を勤める。

主催

名曲能の会

TEL・FAX 048（482）0068



「船弁慶」大村　定（平成三年）

番組

解説　金子直樹

狂言

八句連歌　シテ　野村万作　アド　深田博治

――休憩二十分――

能

船弁慶

子方　大村稔生
シテ　大村定
ワキ　安田登
真之伝　ワキツレ　高橋正光
ワキツレ　吉田祐一
間　奥津健太郎
後見　塩津哲生　中村邦生
大鼓　國川純　太鼓　小寺真佐人
小鼓　曽和正博　笛　槻宅聡
地謡　佐々木多門　長島茂　粟谷浩之　出雲康雅　友枝雄人　粟谷能夫　金子敬一郎　粟谷明生

終了予定　午後四時

□本日の上演曲

能「船弁慶」

源義経は平家を滅ぼし功績をたてますが、兄頼朝と不仲になり、船で西国へ落ちのびようと津の国大物浦にやって来ます。義経を慕ってついて来た静御前は都へ帰るように言い渡され、名残りの酒宴が催されます。静は越王勾践と陶朱公の故事をひいて、いつか義経も頼朝の信頼を取り戻すだろうと語り舞い、別れの悲しさに泣く泣く一行を見送ります。

義経一行が船出すると、にわかに風が変わり波が押し寄せます。船頭が必死で船を操っていると、海上に平家一門の亡霊が現れ、平知盛の幽霊が義経を海に沈めようと、長刀を持って襲いかかります。義経は少しも騒がず、刀を抜いて知盛の幽霊と戦います。そこを弁慶が押し隔て、数珠を揉んで五大尊明王に祈祷すると、知盛の幽霊はしだいに遠ざかり、ついに消えてしまうのでした。

前シテは義経との別れに沈んだ心で、しっとりと悲しみの舞を舞う静御前。後シテは義経に怨みを持って激しく襲いかかる知盛の幽霊。二つの異なった人格、性格の違う場面を、一人のシテが演じ分けるという特異な作品です。この前後を劇的に繋ぐのがワキの弁慶の役割です。作品全編を通して主要な位置を締めています。一方、義経は子方が演じます。本来大人の役ですが、静との情愛を露骨なものにしないための能らしい工夫です。間狂言も船頭として劇に参加し、船中での弁慶とのやりとりや、小鼓と大鼓の「波頭」とよばれる囃子で表現される荒波に揉まれる船を必死で操る場面など、多くの見せ場を持っています。こうして大勢の登場人物の活躍と現代劇に近い展開により、わかりやすく魅力的な作品です。今回は小書「真之伝」により、一層変化に富んだ上演となります。

狂言「八句連歌」

親しくしている連歌の友人から金を借りている男が、借金の言い訳を折り込んだ句を詠むと、それを聞いた友人との間で連歌の付けあいが始まりますが…。

友人への借金返済の言い訳を、連歌の付け合いという雅さでくるんだ作品。連歌は中世に発達した詩の形式で、五・七・五の長句と七・七の短句を交互に詠み進めます。この作品で詠まれる句は恋の歌が多いのですが、その裏に借金の返済をめぐる攻防が隠されているところが洒落た味わいを感じさせます。

文・金子　直樹

金子　直樹（かねこ・なおき）

能楽評論家。一九五四年生まれ。学生時代から能・狂言の普及・評論活動を開始。解説、評論、講演などを中心に活躍中。近著に『能鑑賞二百一番』『狂言鑑賞二百一番』（淡交社）

平成三十年職分会一月公演
一月七日（日）
巴
大村定